九州看護福祉大学紀要
Vol.7, No.1, 25-33 (2005)
ISSN 1344-7505

［原　著］

がん告知に対する夫婦の認識

齊田菜穂子[1,*]、阿蘇品スミ子[2]

【要旨】がん告知率は専門病院では 90%以上、一般病院では病院により差はあるが 50%前後になった。日本では本人に言う前に家族に相談、あるいは本人と家族同時に告知することが多い。本研究は、配偶者ががんであった場合、がん告知をどう考えるか、本人と配偶者の意思の関係を明らかにすることとした。その結果、自分自身の告知は夫婦とも積極的であるが、家族への告知は消極的であった。告知の時期は夫では診断がついたときを、妻の 4 割は診断後少し時間経過した時期を希望していた。夫ががんであった場合、夫婦の告知の意見の一致は 27 組（65.8%）、妻ががんであった場合の意見の一致は 30 組（73.1%）であった。夫ががんであった場合と妻ががんであった場合の両者とも一致していた夫婦は 21 組（51.2%）であった。両者とも一致している夫婦は過去に告知について話をしていたり、相手が思っていることを知っていたりするケースが多く、不一致群は知らないケースが半数以上を占めていたことが明らかになった。

キーワード： がん告知、夫婦、インフォームド・コンセント

【緒言】

1960 年代後半より、患者の自己決定権およびインフォームド・コンセントの尊重に関する社会的気運が高まり、特にアメリカにおいては約 20 年間で医師のがん告知に関する姿勢は一変し、ほぼ全例に告知するようになった[1)]。

わが国においても近年、がん告知の関心が高く、患者の知る権利があるという自己決定権、インフォームド・コンセントの尊重により、がん告知の問題が活発に議論されるようになってきた。国立がんセンターのがん情報サービスでは、がん病名の告知マニュアルを掲載し、告知の基本的姿勢として、本人に伝えること、家族には先に知らせないということを原則とし、診療から治療開始までできるだけ同じ医師が担当し、人間関係や信頼関係が形成されていく中で告知を行い、場所（空間）にも配慮して患者の状態を考慮しながら行っていくことをあげている[2)]。

厚生省研究班のアンケート調査による国内のがん告知率は早期・末期を含めて 1992 年では全体の 18%であったが、1997 年では 75%に急増している[3)4)]。専門病院では 92%(埼玉県立がんセンター)である[5)]。しかし、6 年前の結果ではあるが直接がんということを患者本人が告知されていたのは全体の 2 割であった[6)]。本人に告げる割合は高くなってきているが、患者に病名を告知する際に、まず患者の家族に告げ、本人へ告知するかどうかを家族にゆだねている部分が大きい。また、粗雑な告知や「人は誰でも死ぬ」という諭しに傷つく人々の姿[7)]が語られたものもあった。

健康人を対象とした調査で、自分が「がん」の場合、告知希望の割合は高いが、家族が「がん」の場合、告知希望の割合はかなり減少すると報告[7)8)9)10)]があり、家族間で告知に対する考え方が一致していない場合、本人の意思を尊重していないと考えられる。

本研究は、夫婦を対象にお互いががんである場合、がん告知に関して本人と配偶者はどのような希望を持っているのか、そしてがん告知に関する夫婦の見解は一致しているのかをどうか明らかにすることを目的とした。

[1]山口大学医学部保健学科、*連絡先、[2]九州看護福祉大学　看護福祉学部看護学科

【方法】

１）対象

対象はＦ県Ｋ市に住む夫婦で本研究の趣旨に同意が得られた夫婦を対象とした。

２）調査方法

データ収集期間は、2002 年８～9 月の２ヶ月間で、スーパーマーケットにきている人に声をかけ、協力を得ることができた 50 組の夫婦の家庭にがん告知に関するアンケート調査用紙を配布した。アンケート用紙は、夫用と妻用の２種類を用意し、２種類を各家庭に配布した。アンケートの回収は、配布後１週間以内に行なった。アンケート用紙に回答するにあたりお互いに相談せずに記入するように説明した。配布した 50 組(回収率 100%)の夫婦から回答を得た。そのうち、質問項目に記入漏れがなく、本人と配偶者ががん患者でない 41 組（82.0%）を有効回答とし、分析の対象とした。

３）調査内容

主な質問内容は過去におけるがん告知を考える機会の有無、自分ががんであった場合のがん告知希望の有無、告知の時期はいつがいいか、がん告知を最初に誰から聞きたいか、どのような内容を知りたいか、告知を受けたときどのように受けとめるか、配偶者ががんであった場合のがん告知希望の有無、配偶者ががんであった場合配偶者の告知の希望を知っているかなど計 15 項目である。これらの項目は、村田國男の病名告知と QOL や過去の調査[11-16]を参照に作成した。

４）統計処理

各項目の夫と妻の比較はχ^2検定、夫婦間の一致度をみるためにクロス表を用いてマクネマー検定により行った。また、夫婦の告知希望の意見が一致している群を一致群、一致していない群を不一致群とし、その比較をχ^2検定で行った。なお、統計処理には統計ソフト SPSS11.0 for windows を用い$p<0.05$を有意水準とした。

５）倫理的配慮

対象者には、研究の参加は自由意思であること、一度参加を決めていても途中で参加を拒否できることをアンケート調査依頼時に説明し承諾を得た。また、対象者のプライバシーを保障するために、アンケート用紙は無記名で記入し、個人名は一切公表しないことをアンケート調査依頼時および回収時に口頭で説明を行った。

６）用語の定義

本研究の告知は、病名告知のこととする。

【結果】

１）対象の概要

対象者の年齢は、夫は 20～90 歳代、妻は 20～80 歳代で、夫は 40 歳代、50 歳代が 12 名と最も多く、妻は 40 歳代が最も多く 16 名であった。(表 1)　夫婦ともに 40～50 歳代が全体の 6 割を占めていた。

表１　年齢構成

年齢	夫 人（%）	妻 人（%）	合計 人（%）
20 歳代	1（2.4）	1（2.4）	2(2.4)
30 歳代	3（7.3）	6（14.6）	9(1.1)
40 歳代	12（29.3）	16（39.0）	28(34.1)
50 歳代	12（29.3）	9（22.0）	21(25.6)
60 歳代	8（19.5）	6（14.6）	14(17.1)
70 歳代	3（7.3）	2（4.9）	5(6.1)
80 歳代	1（2.4）	2（4.9）	3(3.7)
90 歳代	1（2.4）	0（0.0）	1(1.2)
合計（人）	41（100）	41（100）	82(100)

２）今までに「がん告知」について考えたことの有無とそのきっかけについて

「がん告知について考えたことがある」と回答した夫は 33 名(80.3%)、妻は 33 名(80.3%)、「考えたことがない」と回答した夫、妻はともに８名（19.7%）であった。夫と妻の間には有意差はみられなかった。

がん告知を考えたきっかけは、夫は、「親近者ががんで亡くなったとき」が 12 名(29.3%)、「がんに関するテレビ・新聞・雑誌などを見て」が 10 名（30.3%）、「親近者ががんになったとき」が 5 名（12.7%）、「知人のがんや死亡」が 4 名（9.8%）の順で、妻は、「がんに関するテレビ・新聞・雑誌などを見て」が 10 名（30.3%）、「親近者ががんで亡くなったとき」が 9 名(22.0%)、「親近者ががんになったとき」が 6 名（14.6%）、

「知人のがんや死亡」が6名（14.6%）であった。親近者ががんになったあるいは亡くなったということがきっかけになっているのは、夫 17 名（41.5%）、妻21名（52.2%）であった。

夫婦のペアでは、ともに考えたことがあると回答したのは29組（70.7%）で、ともに考えたことがないのは4組（9.7%）で、どちらかが考えたことがあるのは8組（19.5%）で、ともに考えたことがあると回答した組が有意に高かった。（χ^2=5.883、df＝1、P=0.015）

3）がん告知希望の有無

(1)「夫ががんである」と診断された場合、本人は38名(93.0%)が告知を希望し、3名（7%）が告知を希望してなかった。家族である妻は 26 名（63.4%）が夫への告知を希望し、15 名（37.0%）が告知を希望していなかった。(表2)

表2　アンケート調査結果

夫n＝41　妻n＝41

項目	夫	妻	合計
告知について考えたことがあるか			
①考えたことがある	33	33	66
②考えたことはない	8	8	16
自分ががんの場合、告知してほしいか			
①真実を告知してほしい	38	31	69
②告知してほしくない	3	10	13
告知してほしい理由			
①将来の計画に必要	20	13	33
②自分の体のことだから知りたい	10	14	24
③自分のことなので知る権利がある	4	2	6
④これからの治療について理解できる	12	9	21
⑤その他	0	1	1
告知してほしくない理由			
①事実を知らないほうが気が楽	0	5	5
②家族が知っていれば十分	2	1	3
③がんといわれると将来に希望がなくなる	0	4	4
④その他	1	1	2
告知の時期			
①診断がついたとき	34	24	58
②自分が知りたいと思ったとき	5	11	16
③自分が精神的に落ち着いているとき	2	5	7
④その他	0	1	1
告知は誰から聞きたいか			
① 医師	36	28	64
②配偶者	5	13	18
告知の受け止め			
①冷静に受け止めることができるだろう	8	5	13
②時間がかかるが冷静に受け止めるだろう	26	19	45
③精神的に混乱してしまうだろう	1	7	8
④どうなるかわからない	6	10	16
告知内容			
①診断名	4	4	8
②病状・進行の程度	30	31	61
③余命	4	2	6
④治療方法	3	4	7
余命少ないときの過ごし方			
①入院してできる限り治療を受けたい	6	2	8
②入院して痛みをとって楽にしてほしい	10	9	19
③自宅で過ごしたい	15	19	34
④ホスピスへ入院したい	6	9	15
⑤その他	4	2	6

本人と配偶者である妻の意見が一致していたのは27組(65.8%)で、本人も妻も告知を望んでいるのは25組(60.9%)、本人も妻も告知を望んでないのは2組(4.9%)で、どちらかが望んでいるのは14組（34.1%）で意見が一致しているほうが有意に高かった。(P=0.002)（表3）

告知してほしいと回答した夫の理由は、「将来の計画に必要」が 20 名、「治療について理解できる」が 12 名、「自分の体のことなので知りたい」10 名の順に多かった。告知すると回答した妻の理由は、「将来の計画に必要」が 15 名、本人が望んでいるが5名、「自分の体のことなので知りたいだろう」が5名であった。

告知してほしくないと回答した夫の理由は、「家族が知っていれば十分」、「事実を知らないほうが気が楽」であった。夫に告知しない妻は、「告知をすることで本人の希望を絶ってしまうと思うから」、「事実を伝えるのはかわいそうだから」、「本人が望んでいないから」であった。

(2)「妻ががんである」と診断された場合、妻本人は 31 名(76.0%)が告知を希望しているが、10 名（24.4%）は告知を希望していなかった。家族である夫は、28 名(68.3%)が告知を希望しており、13 名（32.0%）が告知を希望していなかった。(表4)

本人と配偶者である夫の意見が一致していたのは30組(73.1%)で、本人も妻も告知を望んでいるのは24組(58.5%)、本人も妻も告知を望んでないのは6組(14.6%)で、どちらかが望んでいるのは11組（26.8%）だった。(表5)

告知してほしいと回答した妻の理由は、「自分の体のことなので知りたい」14名、「将来の計画に必要」が 13 名、「治療について理解できる」が 9 名の順に多かった。告知すると回答した夫の理由は、「将来の計画に必要」が13名、「本人が望んでいるから」が7名で、妻も夫も「将来の計画に必要」であることが共通の理由だった。

告知して欲しくないと回答した妻は、「知らないほうが気が楽」、「希望がなくなる」であった告知をしないと回答した夫は、「告知で本人の

表3　夫ががんである場合の本人と妻の告知に対する考え

（一致率 65.8%）　P=0.002

		妻		計（%）
		告知する	告知しない	
夫（本人）	告知してほしい	25（60.9）	13（31.7）	38（92.7）
	告知してほしくない	1（ 2.4）	2（ 4.9）	3（ 7.3）
計（%）		26（63.4）	15（36.6）	41（ 100）

表4　妻ががんである場合の本人と夫の告知に対する考え

（一致率＝73.1%）　P=0.549

		夫		計（%）
		告知する	告知しない	
妻（本人）	告知してほしい	24（58.5）	7（17.1）	31（75.6）
	告知してほしくない	4（ 9.7）	6（14.6）	10（24.4）
計（%）		28（68.3）	13（31.7）	41（ 100）

表5　それぞれががんだった場合の告知の有無の一致

（一致率＝63.4%）　P=0.607

		妻ががんのとき夫婦の一致		計（%）
		一致	不一致	
夫ががんのとき夫婦の一致	一致	21（51.2）	6（14.6）	27（65.9）
	不一致	9（ 22.0）	5（12.2）	14（34.1）
計（%）		30（73.2）	11（26.8）	41（ 100）

希望を絶ってしまうと思うから」、「事実を伝えるのはかわいそう」で、夫も妻も希望がなくなることが共通な理由だった。

「夫ががん」と診断された場合も「妻ががん」と診断された場合も告知の希望が一致していた夫婦(一致群)は、21組（51.2%）で、両方とも一致していない夫婦は5組（12.2%）、夫ががんの場合は一致しているが妻ががんの場合が一致していない夫婦は9組(22.0%)、妻ががんの場合は一致しているが夫ががんの場合が一致していない夫婦は6組(14.6%)であった。

告知の有無の理由は一致群では、「将来の計画に必要」、「これからの治療について理解できる」、「自分の身体のことなので知りたい」が共通しており、どちらかが一致している群では「将来の計画に必要」、「自分の体のことなので知りたい」、「知ることでこれからの治療について理解できる」、一致していない群は理由も一致していなかった。

４）告知の時期

告知の時期については、夫は「診断がついたとき」と回答したものが34名(82.9%)で最も多く、次に「自分が知りたいと思ったとき」5名(12.2%)、「精神的に落ち着いているとき」が2名(4.9%)であった。妻は「診断がついたとき」が24名(58.5%)、「自分が知りたいと思ったとき」が11名(26.8%)、「精神的に落ちついているとき」が5名(12.2%)であった。夫も妻も自分の告知の時期の希望は診断がついたときが一番多かった。

告知の有無の希望が一致している群（以下一致群）と、希望が一致していない群（以下不一致群）を比較すると、告知の時期に対する希望は、一致群が15組（71.4%）、不一致群が8組（40%）で夫婦の回答が一致しており、一致群のほうが有意に一致している割合が高かった。（χ^2＝4.108、df＝1、P＝0.04）一致していた時期は両群とも「診断がついたとき」であった。

５）告知をする人

告知は誰から聞きたいかについては、夫は「医師」と回答したのが最も多く36名（87.6%）で「配偶者」が5名(12.2%)であった。（χ^2＝23.44 df=1　P=0.000）

妻も「医師」が最も多く28名（68.2%）で、「配偶者」は13名（31.7%）であった。（χ^2＝5.488 df=1　P=0.019）　夫と妻の比較では、夫が医師と回答した割合が高い傾向が見られた。妻は、夫に比べて配偶者と回答した割合が高かった。

「医師」と回答した夫の理由は、信頼できる、正しい知識が得られると回答しており、妻も同様の理由であった。「配偶者」と回答した夫は、理解してくれる、落ち着いて聞ける、ショックが少ないように言ってくれるなどと回答しており、妻も同様に信頼できる、精神的に楽、ショックが少ない、一緒に考えていける、夫のほうが素直に受け入れられるなどが回答されていた。

６）告知内容

知りたい告知の内容は、夫は「病状・進行の程度」が30名(73.1%)、「診断名」4名(9.7%)、「余命」4名（9.7%）、妻は「病状・進行の程度」31名（75.6%）、「診断名」4名(9.7 %)、「余命」2名（4.2%）の順で、夫も妻も病状・進行の程度が高かった。（夫：χ^2＝50.8　df=3　P=0.000、妻：χ^2=56.3　df=3　P=0.000）夫も妻も年齢による回答のちがいはみられなかった。

７）告知の受けとめ

自分ががんだった場合の告知の受け止め方については、夫の回答は「時間がかかるが冷静に受け止める」が26名（63.4%）、「冷静に受け止めることができる」が8名（19.5%）、「どうなるかわからない」が6名（14.6%）の順であった。妻は「時間がかかるが冷静に受け止める」が19名（46.3%）、「どうなるかわからない」が10名(%)、「精神的に混乱してしまうだろう」が7名（17.1%）、「冷静に受け止めることができる」が5名(12.1%)の順であった。「冷静に受け止める」と「時間はかかるが冷静に受け止める」を合わせると夫は34名（82.9%）、妻は24名（58.5%）であった。夫も妻も「冷静に受け止める」の回答が有意に高く（夫：χ^2＝46.3　df＝２　P＝0.000 妻：χ^2＝12.0　df＝２　P＝0.002）、夫が妻より冷静に受け止められると回答している割合が高い傾向がみられた。

８）余命の過ごし方

「がん」と診断され余命が少ないとしたらどの

ようにしたいかについては、夫は「自宅で過ごしたい」の15名（36.5%）が最も多く、「入院して痛みをとって楽にしてほしい」が10名(24.3%)、「入院してできる限り治療を受けたい」が 6 名（12.2％）、「ホスピスに入院したい」が６名（12.2%）の順で、回答に有意差は見られなかった。妻は「入院などせず自宅で過ごしたい」の19名（46.3%）で最も多く、「入院して痛みをとって楽にしてほしい」9 名（29.1%）、「ホスピスに入院したい」が 9 名（29.1%）の順で、「入院などせず自宅で過ごしたい」の回答が有意に高かった。（χ^2＝23.76、df=4　P=0.000）夫と妻の回答に差は見られなかった。

９）配偶者の告知に対する気持ちについて

配偶者の告知の希望を知っているかについては、夫は妻が「告知を望んでいることを知っている」と回答したのは25名（60.9%）で、「知らない」が16名(39.0%)、妻は夫が「告知を望んでいることを知っている」を回答したのは 21 名（51.2%）で「知らない」が 20 名(48.8%)であった。

配偶者が告知を望んでいることを知っていると回答した夫は「がんについて以前話し合ったことがある」が 11 名（40.0%）、「なんとなくそう思っているだろうと思う」が11名（48.0%）、であった。妻では「がんについて以前話し合った」が10名（47.6%）、「なんとなくそう思っているだろうと思う」が8名(38.0%)であった。

夫ががんであった場合と妻ががんであった場合の夫婦の回答が一致していた群(一致群)と一致していなかった群(不一致群)でみると、一致群は告知を望んでいるかどうか気持ちをお互い知っているという回答で一致しており、不一致群は気持ちを知らないという回答で一致していた。

【考察】

配偶者間での告知の有無について

１）がん告知の個人的希望と配偶者への配慮

今回の調査で、今までに「がん告知」について考えたことがある夫婦は29組(70.7%)であった。この理由として、現在「がん」は三大死因の一つであり、死因順位は昭和56年以来第一位であり死亡数も年々増加していることから、周囲の人々が「がん」にかかって亡くなることが多い現状におかれていることが考えられる。また、考えるきっかけの回答に「テレビ、新聞、雑誌などをみて」の回答が30%以上であることからわかるように、テレビ番組でがんの治療法などがんに関することがクローズアップされることが多くなり、がんが身近なものになっているため、がん告知について考えたことがある夫婦が多いと考えられる。また、今回調査を行った年齢層は40､50歳代が多く回答しており、40歳代からがんに罹患する割合が高くなることや働き盛りの時期であり、家族を養っていかなければならないという責任がある立場にあることが告知について考える機会をもっていたと考えられる。

２）がん告知希望の考え

がん告知希望の有無については、自分ががんと診断された場合は、夫は 93.0%が告知を希望し、妻は76.0%で､妻のほうが20%近く告知を希望する割合が低かった｡今回の調査では男性のほうが、自分ががんである場合、告知を希望する意識が高かった。配偶者に対しがん告知希望は夫では68.3%、妻では63.4%で、夫と妻の配偶者に対するがん告知を望む割合はあまり変わらず、他の調査[15) 16)]で得られた割合とほぼ同じ調査結果が得られた。

本人と配偶者の望みが一致している割合は夫ががんの場合は65.8%､妻ががんの場合は73.1%とやや妻ががんの場合が一致している割合が多いが、告知する意思が一致している割合はほとんど変わらなく、妻ががんの場合告知をしないという意思が一致している割合が多かった。これは、理由にもあるように、夫ががんの場合よりも妻ががんの場合は本人も配偶者も希望がなくなる、希望を断ってしまうことを重視していると考えられる。夫婦の告知の希望が一致していない数は、夫ががんの場合 14 組(34.1％)、妻ががんの場合 6 組（14.6%）で、夫ががんの場合は3割以上が本人と配偶者で意見が違っていた。

現在、診察前に病名などの告知の希望を調査し告知を行うことは患者の意思を尊重し、自己決定

権の尊重という意味で有意義であると考えられる。しかし、病名や病状説明の場において、日本では本人に言う前に家族に相談するか本人と家族同時に告知することが多い。また、日本人は、「家族」への思いで、個人がなかなか確立しがたい風土があり、家族がその分を引き受けている[17]のが現状であるといわれるように、家族を第一優先することが多い。これらのことから、家族を優先すると本人の希望と異なる告知を受けることになり、患者本人の意思を尊重したインフォームド・コンセントが行われていないことになる。

アメリカでは「患者の権利章典」が出されてからは高校の教科書などにも患者には知る権利があるということを、成人になる前からしっかりと教え込まれている[18]。しかし、日本では基本的に患者の権利を主張するという発想が定着していないため、患者に診断の結果を知らせるのか知らせないのかの判断は、医師の職業的な裁量権の中、つまり医師に委ねられているところもある。がんも慢性期疾患となりうる現在において、病気を自己管理していくことが重要であるため、アメリカのように早い時期から患者の権利を学ぶ機会をつくることが必要である。

告知の時期は、夫は圧倒的に診断がついたときに知りたいと回答したが、妻の4割は自分が知りたいと思ったとき、精神的に落ち着いているときと回答していることから、診断がついたときから少し時間経過を必要としていることが考えられる。

誰から告知を聞きたいかは、夫婦ともに「医師」が多かった。理由を見てもわかるように専門性を求めていることから高かったのだと考えられる。妻の3割は夫からまず聞きたいと回答していた。これは、夫婦というお互いに支えあう強い絆や信頼、依存からだと考えられる。また、緩和ケア施設を利用している患者のインタビューのなかで、「こんなに恐ろしいことを医師から言われ怖くなり、その病院から逃げ出した」と答えた女性がおられた[19]。 告知は段階を踏んでするものであり、家族からという患者の意思を尊重した配慮も必要であると考えられる。

余命のすごし方について、妻よりも夫の回答に「入院してできる限りの治療を受けたい」が多かった。それは、回答者の年齢は40歳代が多く、働き盛りで家族を養っていかなければならないという責任がある立場にいるため望みがわずかでも積極的に治療を受け早期に社会復帰したいと望む気持ちがあるからだと考える。ホスピスの回答が少なかったが、回答者の声として、「宗教が絡んだようなところや死ぬためにいくところは行きたくない。」などがあり、ホスピスのイメージが一般の人にはまだ十分に浸透されていず、それぞれの病院の役割などを啓蒙していく必要と緩和ケアという表現も入れる必要があったと考えられる。

がん告知をすることは、患者は真実を知る権利を持つ、訴訟を避けるため、つらい治療に耐えるため、財産や仕事のけりをつけるため、生き方を変えるためと言われている[11]。 日本は、がん告知に対し積極的な傾向にある。今回の調査結果から、がん告知をより効果的に行われるためには、家族間のコミュニケーションの強化、患者の権利の意識向上、正確な情報が必要である。そして、積極的ながん告知の風潮にあってもなお、本人と家族のがん告知の希望のずれが3割はあることと根強い伝統的な日本人固有の価値観により「告知が望ましくない場合がある」ということを常に心にとどめておく必要がある。

【結論】

- 自分自身へのがん告知に対しては夫も妻も積極的であるが、家族への告知は消極的である。（夫は3割、妻は4割）
- がん告知の時期について、夫は診断がついたときに知りたいが、妻の4割は診断がついてから少し時間経過を必要としている。
- がん告知は医師からききたいがほとんどであるが、妻の3割は夫から告知を受けたいと考えている。
- 41組の夫婦のうち21組が、夫ががんの場合も妻ががんの場合もがん告知の有無の考えが一致していた。
- 告知希望の意見が一致している夫婦は過去にがん告知について話し合ったり、相手が思っていることを知っていたりするケースが多く、意見が一致していない夫婦は相手の気持ちを知らないケースが多かった。

・告知希望の意見が一致していない夫婦は、日ごろからがん告知について話し合うなど、家族間のコミュニケーションの強化や患者の権利の意識を向上することが大切である。
・これらから、家族と本人のがん告知に対する意思が半数近く一致していないことを考慮した援助が必要である。

【研究の限界】

今回の研究対象は40, 50歳代が多く、それ以外の年代について十分なデータが得られなかった。また、地域を限定していたので、今後、さらに対象者を拡大し、調査する必要がある。

【謝辞】

本研究の調査にご協力いただいた皆様方に心より謝意を表します。

【文献】

1） Dennis H. Novack, Robin Plumer, Raymond L. Smith, Herbert Ochitill, Gary R. Morrow, John M. Bennett: The journal of American Medical Association. 1979;241(9)：897-900
2）岡村仁. がん告知マニュアル. 東京. 国立がんセンター病院. 1996. p.1-7.
3）がん告知率75%.毎日新聞.1998.3.28
4）岡田定、西崎統. がん告知の現状 アンケートより　一般病院の現状. 日本内科学会雑誌.1996;85(12)：2053－2057.
5）季羽倭文子、石垣靖子、渡辺孝子　監修.がん看護学　ベッドサイドから在宅ケアまで.三輪書店; 1998. p.86-87.
6）内富庸介. がんとストレス. 診療と新薬.2001；38(1)：35-74
7）柳原和子.がん生還者たち.中央公論新社;2002.
8）Mizushima Yutaka, Kashi Tatsuhiko, Hoshino Kiyoshi. 富山県におけるがん告知に関する意識調査.Japanese Journal of Medicine.1990;29(2)：146-155.
9）寺西伸介、吉田宗永、中村泰清、森崎堅太郎、佐藤正、辻瀧太郎. 大阪府守口市での医師会会員と市民の「がん告知」に関する意識調査. 厚生統計協会. 厚生の指標;2003;50（13)：21-29.
10）毎日新聞.高齢化社会世論調査;1996.10.
11）村上國男. 病名告知とQOL. メヂカルフレンド社;1996. p.40-59.
12）水田哲明、阿川千一郎、埜口武夫. 癌告知の希望調査と告知の現状. 診断と治療.1997；85(2)：301－307.
13）田中繁宏、大島秀武、宮本忠吉、他5名. がん告知に関する健常学生での意識調査. CAMPUS HEALTH.1997;33：76－81.
14）赤嶺依子、興古田孝夫. 看護学生と一般専門学校生を対象にした末期がん告知に関する意識の比較・検討. 医学と生物学.2002；144（3）:119－124.
15）田畑広美. 癌告知に関する家族の意識調査. 看護総合. 1994：46－48.
16）河野仁志. インフォームド・コンセントにおける癌告知－入院患者・家族の意識調査－. 島根医学.1996；16(1)：27－31.
17）島田よう子. 生命の倫理を考える－バイオエシックスの思想－北樹出版;1999. p.146-148.
18）木村利人. 自分のいのちは自分で決める：生病老死のバイオエシックス＝生命倫理. 集英社;2000. p.105-106.
19）齊田菜穂子. がん患者の緩和ケア施設を選択する過程における体験. 兵庫県立看護大学修士論文. 兵庫県立看護大学大学院. 2002.

The Journal of Kyushu University
of Nursing and Social Welfare
Vol.7, No.1, 25-33 (2005)

ISSN 1344-7505

［**Original Article**］

Discrepancy of Recognition of Notification of Diagnosis of Cancer between Couple

Nahoko Saita [1,*], Sumiko Asoshina [2]

[1]*Faculty of Health Sciences, Yamaguchi University School of Medicine, and*
[2]*Kyusyu University of Nursing and Social Welfare, Japan*

【Abstract】

The cancer notification rate was 90% or more in the special hospital, and a general hospital came also to exceed half the number. It notifies the family in Japan before it says to the person in question and it notifies a consultation or a person in question and a simultaneous family.
The purpose of this study is to clarify the discrepancy of recognition between a husband and a wife regarding their belief system about a notification of diagnosis of cancer.

As a result, the notification to the family was passive though own notification was positive with the married couple. Time that had passed while it was a few by 40 % of the wife since it diagnosed it was hoped for at time when the husband attached the diagnosis at the time of the notification. Only 27 couples (65.8%) were consistent in cases when a husband was diagnosed with cancer. Also, 30 couples (73.1%) were so, in cases when a wife was diagnosed. Only 21 couples (51.2%) were consistent with each other in cases of both husband's diagnosis and wife's diagnosis.

The consistent group reported they had discussed about cancer-notification with the spouse in the past; on the other hand, the inconsistent group reported they had not discussed in the past nor they did know spouse's expectation (p=0.03).

***Key words*: Notification of Diagnosis of Cancer, couples, Informed consent**

*Corresponding author, FAX：+81－836-22-2855, E-mail：naho@yamaguchi-u.ac.jp